SI-11 住居跡と近世の墓跡

SI-7 住居跡

SI-7 住居跡カマド

SI-6 住居跡

SI-6 住居跡カマド

SI-6 住居跡炭化材

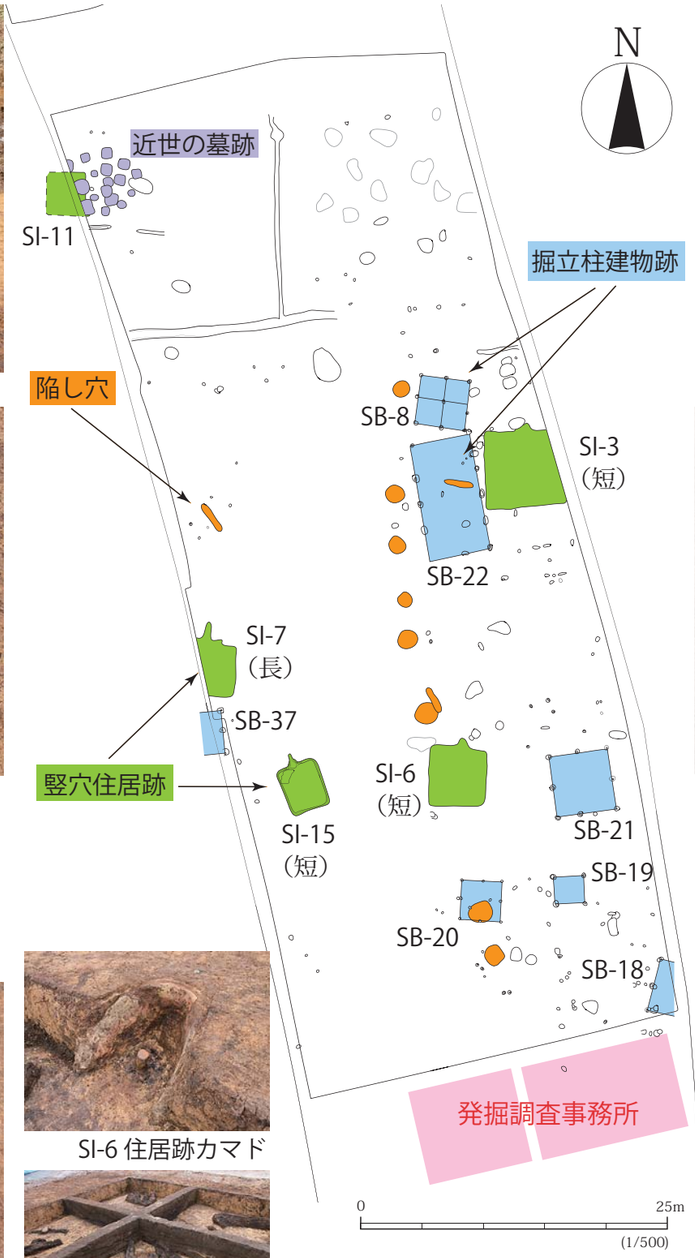


図３　発見した遺構

※（短）は短煙道カマド、（長）は長煙道カマドを指す

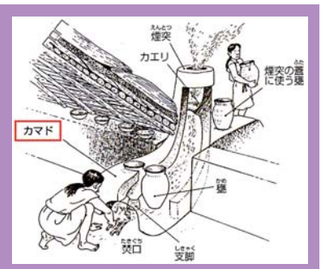
SI-3 住居跡

SI-15 住居跡

SK-29 陥し穴

SK-12 陥し穴

長煙道のカマド（まほろん復元住居）



短煙道のカマド
（『かみつけの里図録』より）

東北地方のカマドは住居内部にあり、長い煙道が外に延びます。これに対し、関東地方に類似する短煙道のカマドは壁を掘り込み、軒先に煙突が付きます。

８世紀前半の土師器（御駒堂遺跡自動車道調査地点）

東北地方の食器は厚手で内側を黒く仕上げますが、関東系土師器は食器・煮炊き具とも薄手につくられ、赤褐色～褐色をしています。

図４　カマドと土器の比較

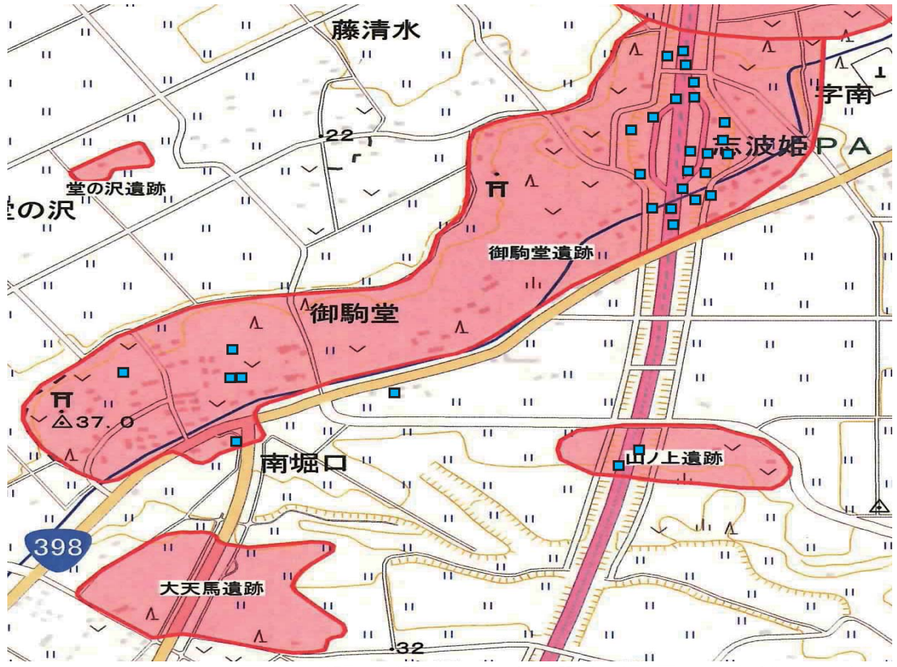


図５　御駒堂遺跡と山ノ上遺跡で発見された移民の住居

まとめ　－奈良時代前半の支配拡大政策と御駒堂遺跡

奈良時代前半の律令国家の範囲は、太平洋側が大崎市域、日本海側は山形県のほぼ全域から秋田市にいたる海沿いの地域までで、栗原地方はそのラインの外側に位置していました。御駒堂遺跡の調査は、こうした地域に対して関東地方から大規模な移民が行われていたことを明らかにしており、当時の国家がどのように支配を拡大しようとしたのかを具体的に知る貴重な成果となりました。今後は、遺構と遺物の検討を重ねて、古代栗原地方の歴史の解明につなげていきたいと考えています。